

翻訳・訳注

工藤平助『赤蝦夷風説考』を読む—現代語訳と注釈—

吉 田 俊 則

富山大学人文科学研究第84号抜刷

2026年3月

翻訳・訳注

## 工藤平助『赤蝦夷風説考』を読む—現代語訳と注釈—

吉 田 俊 則

目次

はじめに

I 加模西葛杜加（カムサスカ）風説考という書名

II ヲロシヤとカムサスカ国

III 「赤蝦夷風説考」成立の経緯

IV 蝦夷地開発論

V 鎖国と開国のはざま

凡例

現代語訳「赤蝦夷風説考」

### はじめに—解題に代えて—

『赤蝦夷風説考』は江戸時代後期の有名な作品であり、これまで多くの歴史書で言及され、解説され、その歴史的意義が語られてきた。したがって、ここでは包括的な解題を付すことは控える。

ロシア史研究者として筆者は、講義などにおいてしばしばこの本に言及してきた。その際、主として『赤蝦夷風説考』（以下、風説考と略記）下巻で語られているロシア史の知識がどれほど史実と合致しているのかがつねに気に掛かる事柄であったが、これまで立ち止まって検証することはしなかった。今それをおこなおうというのが本稿の第一の目的である。

とはいえ、『風説考』上巻で語られる日本北辺へのロシア進出の論はきわめて刺激的で興味深く、もちろん素通りするわけにはいかない。その意味を考えようとするとき、江戸時代後期の知識人が針の穴から覗くかのようにして著した世界の記述を、一個の評論として味わってみたいと感じた。あえて現代語訳にするのは筆者のそうした私的関心のゆえであることを最初にお断りしておきたい。

『赤蝦夷風説考』には刊本となった多くの版がある<sup>1)</sup>。戦時中に出版された『北門叢書』全六冊の解説・校訂者大友喜作は、その第一冊にこの作品を収め、風説考の成立過程、風説考の献策をうけて実施された蝦夷地検分の一部始終、田沼意次の失脚と蝦夷地開発計画の挫折まで、200頁を超える詳細な解説を付した。本稿現代語訳は、この北門叢書版の原文を底本とし、この解説に依拠しながら読み解いていった所産である。以下では、大友解説で重要と思われるいくつかの論点を取り上げ、筆者なりの観点からそれらを再構成して若干の解説を試みたいと思う。

## I 加模西葛杜加（カムサスカ）風説考という書名

大友喜作は赤蝦夷風説考の書名について、次のように述べている。

その書名は最初「加模西葛杜加風説考」といつたらしく、それは現に内閣文庫所蔵「蝦夷地一件」中に収められているものを見ると、原名「加模西葛杜加風説考」とあったのを、二本の朱線で、「加模西葛杜加」の六文字を抹消し、傍らに「赤蝦夷」と訂正してあることから判断される<sup>2)</sup>。

加模西葛杜加はカムサスカと読み、もちろんカムチャツカ半島のことである。工藤平助が赤蝦夷風説考を書いたきっかけは、1771年（明和八年）のハンペンゴロウ事件<sup>3)</sup>であった。ハンペンゴロウことベニョフスキは、仲間とともにロシア軍艦を奪取してカムチャツカ半島を脱出し、日本近海をさまよった。そのとき日本の官憲が国名を尋ねるとカムサスカと答えた。工藤平助はこのカムサスカの正体を解明するために『風説考』を著したと言ってもよく、それゆえ加模西葛杜加風説考という書名が付された。この書物は江戸幕府中枢に上呈され、最終的には時の権力者田沼意次の目に止まった。そしてこの加模西葛杜加風説考は「蝦夷地一件」という

---

1) 「赤蝦夷風説考」は『北門叢書』第一冊（北光書房、1943年）の他、寺澤一他（編）『北方未公開古文書集成』第三卷（叢文社、1978年）や『新北海道史』第七巻史料一（1969年）などにも収録されている。北門叢書版は刊本としてあまり上質ではなく、誤記や脱漏と思われる箇所が少なくないが、今回は他の版も参考にしながら、大友の解釈を踏まえる意味で北門叢書版を底本とした。史料学的観点から、岩崎奈緒子の一連のきわめて優れた研究があり、それらも可能な限り参照した。岩崎奈緒子『近世後期の世界認識と鎖国』、吉川弘文館、2021年、同「研究ノート『赤蝦夷風説考』再考」、また同「史料紹介 天理大学附属天理図書館所蔵 加模西葛杜加風説考」、この二篇はいずれも『北海道・東北史研究』第3号、2006年に所収。

2) 『北門叢書』第一冊、p.45。なお、本来の書名と思しきは「加模西葛杜加風説考」で、大友は国の文字を書き落としているかと思う。岩崎奈緒子、前掲書、第一章の一を参照されたい。

3) この事件について詳しくは本稿注49を見よ。

文書に収められて残された。したがって、朱線で書名を訂正したのは幕府要路の誰かということになる。当時すでに北方からやって来るロシア人を赤人<sup>あかひと</sup>とか赤蝦夷と呼んでいたから、この訂正がおこなわれたということが推測される。

この問題にもっとも精通されている岩崎奈緒子は、2006年の研究ノートで「私たちは、今後『赤蝦夷風説考』という書名を『加模西葛杜加国風説考』という本来の書名に改めなければならない<sup>4)</sup>」と述べ、2021年の著作では「書名の検証」という一項を立てて、「工藤の書を『アカエゾ風説考』と呼ぶには留保が必要」とし、「寛政期以降ロシア人を意味する語として定着した『赤蝦夷』を用いて、工藤の書を『赤蝦夷風説考』と呼ぶのは、執筆の目的からして誤りと言わねばならない<sup>5)</sup>」と指摘している。

工藤平助のこの本をいずれ「加模西葛杜加風説考」と呼ぶ日が来るのかもしれないが、いまはとりあえず「赤蝦夷風説考」と呼び続けることにする。

## Ⅱ ヲロシヤとカムサスカ国

カムサスカを我々は半島名、つまり地名として理解している。日本の官憲に「カムサスカ」と答えたベニヨフスキもおそらく地名として答えた。だが、聞き取った日本側はそれを国名と理解し、工藤平助もその理解を共有した。この点が『風説考』の叙述を少し分かりにくくしている。

工藤平助は『風説考』冒頭で次のように述べている。

松前人の話を聞くと、蝦夷の奥丑寅の方角に国があり、その名を赤狄という。蝦夷の北東の彼方の海域に千島と呼ばれる大小の島々がある。この島々から折りにふれて交易のため人々がやって来るが、それは昔からのことである。…この人々は赤蝦夷とも赤人とも、たんに蝦夷とも呼ばれるが、総じて奥蝦夷と呼び習わされてきた。ところが近年では漂流と称して折々に蝦夷地のウラヤシベツ、ノツシヤムあたりに船が来るようになった。そのあり様は昔とは異なり、船の作りはオランダの様式で、人々の衣服もオランダ風となり、羅紗、ピロード、猩々緋の服を着て、通詞すら連れている<sup>6)</sup>。

平助はカムサスカを国と考えていたので、蝦夷の北東の果てに赤狄という名の国があると述

---

4) 岩崎奈緒子「研究ノート『赤蝦夷風説考』再考」、p.85。

5) 同 『近世後期の世界認識と鎖国』、p.27。

6) 本稿 pp.120-121。

べる。その人々は昔から蝦夷地のアイヌ人たちと交易をおこなっていて、赤蝦夷、赤人、あるいは奥蝦夷とも呼ばれているという。彼らが交易でもたらすのは鮭や鯨油といった蝦夷の産物である。ここまですれば、彼らはカムチャツカか千島か、いずれにしろアイヌ人に近い土着の人々のように見える。赤蝦夷はロシア人ではなく、オランダ風の文化、つまりヨーロッパ・ロシアの文化に浸りつつあった土着の人々のように聞こえる。

平助は次のようにも書いている。

国名をヲロシヤというのも謎である。…これについて長崎人、松前人の話を突き合わせ、オランダの書物と照合してみると、はっきりとしてきた事情もある。よくよく考えてみれば、ヲロシヤとはムスコビヤの別名であり、赤蝦夷もこれに服属したので、ムスコビヤの役人がその地に来て駐在した。そのゆえに、国名を尋ねられヲロシヤと答えたのであろう<sup>7)</sup>。

平助はヲロシヤをオランダの東にある国と理解し、その国が東漸して、ついには極東に達し、カムサスカ国を支配下に収め、モスクワから役人を派遣して駐在させていると考えた。

以上の記述だけを考慮すると、ロシアに服属する赤狄つまりカムサスカ国の赤蝦夷は、ロシアに服属した土着の民か、あるいはまた、史実を知る我々が想像するに、ロシア国家の拡大に先んじてシベリア・極東に到達した狩猟者か植民者かのロシア人たち、あるいは両者の混交した人々かということになる。あるときから船や身なりが「オランダ風」になったのは、ロシア帝国の本物の軍人や役人、あるいは商人たちが西洋式の大船に乗って蝦夷地に姿を現すようになったという状況の変化が想像される。

平助はさらに次のようにも言う。

赤蝦夷の本国はヲロシヤである。リュス国というのも同じである<sup>8)</sup>。

リュスとはすなわちヲロシヤのことであり、つまりは赤狄すなわちカムサスカ国のことにほかならない<sup>9)</sup>。

この箇所を読むと、ようやくまとまりかけた理解がふたたび綻びそうになる。ヲロシヤがリュ

---

7) 本稿 p.122。

8) 本稿 p.122。

9) 本稿 p.123。

ス国で、赤狄すなわちカムサスカ国である、この等式を飲み込んだ上で、「赤蝦夷の本国はロシア」となれば、赤蝦夷はロシア人ということになる。岩崎は、赤蝦夷がロシア人を意味する語として定着したのが寛政期（主に1790年代）以降であるという<sup>10)</sup>。『風説考』が上梓された天明期（1780年代）にはまだ赤蝦夷の意味が流動的であり、平助の用語法も流動的であったと理解すればよいのかとも思うが<sup>11)</sup>、筆者の理解も曖昧さが拭いきれないままである。

### Ⅲ 「赤蝦夷風説考」成立の経緯

工藤平助に『風説考』執筆を可能にしたのは、彼が涵養していた広い人脈にほかならなかった<sup>12)</sup>。紀州生まれの平助は仙台藩の医家工藤家の養子となり、医業を修めて藩医となったが、江戸定詰めの医師であったため、生涯のほとんどを江戸日本橋の住まいで暮らした。六十九歳で亡くなった<sup>13)</sup>とき、その亡骸は江戸深川の心行寺に葬られた。

大友の解説によれば、前野良澤、大槻玄澤などの蘭医たちや、長崎の大通詞で蘭学者吉雄耕牛などから蘭学の素養を得た。松前藩の元勘定奉行で、飛騨屋事件<sup>14)</sup>で失脚し、江戸にいた湊源左衛門から蝦夷地の知識を吸収した。『海国兵談』の林子平も知友にほかならず、かの松平定信さえ、平助の三女の縁を通じて、互いを知る関係にあったという<sup>15)</sup>。

『風説考』の成立過程を説明するとき、大友が引用し、他の文献でもしばしば引用される文章がある。工藤平助の長女只野真葛が書いた『むかしばなし』の次の一節である。

父様をば田沼時代の人は大智者とおもゑて有りしとぞ。或時公用人とさしむかひて用談終て咄しの内用人いふ。我主人は富にも祿にも不足なし。此上の願には田沼老中の時、仕置たる事とてながき代に人の為に成事をしおき度願なり。何わざをしたらよからんかと問合せしに、父様御こたへに、夫はいかにもよき御心付なり。さあ

---

10) 岩崎奈緒子『近世後期の世界認識と鎖国』、p.27。

11) 前掲書、pp.24-26 参照。岩崎は、最上徳内の赤蝦夷の理解は兵助と異なり、平助の理解を批判して、赤蝦夷をロシア人と考えたと指摘する。

12) 工藤平助の交遊について、『北方未公開古文書』第三巻所収の和田敏明「解説 鎖国の夢を破った古典三名著」、p.8 参照。

13) 歿年は67歳、76歳、69歳と諸説あり、大友は、大槻玄澤が唱えた69歳説がおそらく正しいと述べている。『北門叢書』第一冊、p.17 参照。

14) この事件を公訴した飛騨屋久兵衛は東蝦夷地エトモ、アッケシ、キイタツプ、クナシリや、西蝦夷地ソウヤなどを場所請する松前切っの商人で、松前藩への貸金をめぐり、安永九（1780）年に幕府へ訴え出た。事態が不利になってきた藩側は勘定奉行の湊源左衛門に詰腹を切らせ、源左衛門には判決で重追放処分が下された。『松前町史』通史編第一巻上、1984年、pp.794-97。また、大石慎三郎『田沼意次の時代』、岩波現代文庫、2001年、pp.170-76 参照。

15) 『北門叢書』第一冊、pp.15-24 参照。

らば国を広くするくふうよろしかるべし。問 夫はいかがしたる事ぞ。答 夫蝦夷国は、松前より地つづきにて、日本へ世々随ひ居る国なり。これをひらきて、みつぎ物をとるくめんを被成かし<sup>16)</sup>。

このとき工藤平助と対談していた「公用人」とは、田沼意次の陪臣の三浦庄二か黒澤一郎右衛門のどちらかであったと大友は言う。大友は長女のこの証言を事実と見ており、「田沼用人の依頼に応じたもので、従来伝えられる様に、これを書いてから、苦心して田沼に接近したというような事実はない」と述べている<sup>17)</sup>。ちなみに、主としてロシア事情を叙述した下巻は、上巻の3年前にすでに完成していた。

真葛の記述はさらに「父様書て出されしを、随分うけもよく感心有て、其奉行に父様をなさんといひしとぞ」と続く。『風説考』は田沼の幕閣に好評され、天明五（1785）年の蝦夷地検分を実現させた。後述のように平助は、蝦夷地における金銀銅山の開発と、その産出高を対ロシア貿易の資金とすることを提唱した。平助はまた、鉱山開始後の蝦夷地には奉行においてこれを管理させることが望ましいとも述べた。その「奉行に父様をなさん」とは、田沼政権の意向が漏れ伝えられたものであろうか。

#### IV 蝦夷地開発論

知られているように、天明の蝦夷地検分は実行されたが、本丸というべき蝦夷地開発はそれに続かなかった。田沼意次が失脚して松平定信の政権に変わり、蝦夷地検分に関係した多くの人々には苛烈な処分が下された。その悲劇は別に考察すべき事件というべきであろう。いまは工藤平助が提言したこと、それを受けとった幕府検分隊と政権中枢とが実行すべきと考えたこと、この間にある微妙なずれについてふれておきたい。

工藤平助は、金銀などの鉱山開発を軸とした蝦夷地開発を提唱した。蝦夷地の金銀は、外から入り込んだ山師たちや松前藩によって古くから採掘されていたが、ある時期から廃れ、松前和人地の大千軒岳周辺や、東蝦夷地のクヌイ、ユウラップ、ユウバリ、エリモなどにたくさんの採掘跡が残されるのみであった。また、西蝦夷地のスツキ、ハボロにも砂金の採れる川があった。

こうした金山は「経費と出来高が引き合わず、そのため廃れてきたのもであった」が、「ヲ

---

16) 只野真葛『むかしばなし』、東洋文庫、1984年、pp.143-44。『北門叢書』第一冊、p.43 および『松前町史』通説編第一巻下、1988年、p.22 参照。

17) 大友が二人のうちどちらかと推定しているのに対し、『松前町史』は三浦としている。『北門叢書』第一冊、pp.43、44 および『松前町史』通説編第一巻下、p.22 参照。

ロシアとの交易が始まれば、その力を以って開発することができる」と工藤平助は力説した上で、そのからくりを「蝦夷の金山より百両の金を掘り出してロシアの千両の品々と交易すれば、長く採掘を続けることができる」と説明している<sup>18)</sup>。こうした素朴な重商主義の現実的な効果はかなり疑問で、幕府が主に着目した点もそこではなかった。

平助は「このまま蝦夷を打ち捨てておき、カムサスカの者どもが蝦夷地と一体となれば、蝦夷もロシアの下知に従うようになり、もはや我国の支配を受け付けなからう」と述べる<sup>19)</sup>。金山開発は、日本人が蝦夷地へ関与する手立てでもあり、それによって内陸部を含めた蝦夷地全体への希薄な支配体制を、いわば濃厚化する手段でもあった。国富と言うより領土が、ここでは問題となっている。

他方、幕府による天明の蝦夷地検分の報告書は、検分そのものが『風説考』に触発されたとはいえ、蝦夷地開発の少し異なった見通しを書き残した。検分隊は、東蝦夷地へ向かった普請役山口鐵五郎、青嶋俊三、西蝦夷地へ向かった同じく庵原彌六、佐藤玄六郎、それぞれに下役数名が従う構成であった。

佐藤玄六郎の報告書にはまず、彼らが現地で松前藩の家士たちから聞かされた蝦夷地事情が記されている。松前藩役人は、アイヌは甚だ強欲で、どんな無礼を働かか測り難く、決して近寄ってはならないと彼らに告げた。だが佐藤らは、実際にアイヌに出会って、彼らが「至って正直者で…慈敬、仁愛、礼儀に厚い」人々であるとの印象を記している<sup>20)</sup>。また、蝦夷地でアイヌたちが穀作を試みてそれなりの収穫があったところ、彼らには松前藩から「ツクナイ」<sup>21)</sup>が科され、アイヌたちが聞き覚えた日本語を話したときにも「ツクナイ」が科された<sup>22)</sup>。報告書は、松前藩のこうした「愚蒙政策」を批判的に伝えた上で、蝦夷地のアイヌ人口を約十万人と見積り<sup>23)</sup>、蝦夷地の農業の開発の可能性を示唆した。

この報告書を読んだ幕府の勘定奉行松本伊豆守が田沼意次に上申した天明六（1786）年の「蝦夷地之儀に付申上候書付」には、蝦夷地の地味は豊かで、大山より流れ下る大川やその支流が

---

18) 本稿 p.126、127。

19) 本稿 p.126。

20) 『北門叢書』第一冊、p.93。松前藩が蝦夷地とアイヌの実情をできるだけ外部の目から、とりわけ江戸幕府の目から遠ざけようとしたのはよく知られた事実である。古川古松軒『東遊雑記』（東洋文庫、1964年）には、天明七（1787）年、古松軒が幕府巡見使の一員として松前の江差にあって、宿の亭主に周辺の地理・風俗を尋ねたとき、「領主・役人より堅く口留めあるような口ぶり」を感じたと記されている（p.135）。さしあたり吉田俊則「プロヴィデンス号来航異聞—蝦夷地、松前、ロシア—」（『富山大学人文科学研究』第80号、2024年）p.89を参照されたい。

21) 「償い」つまり決まりを犯したことに対する過料。

22) 『北門叢書』第一冊、pp.91-92。

23) 同上、p.90。

たくさんあり、したがって用水の心配もなく、蝦夷人たちも農業を好むと書かれている。これまでアイヌたちが本格的な稲作をしてこなかったのは、ひとえに松前藩がそれを禁じたためである。アイヌたちに農具と種子をあたえ、農法を伝授すれば、相当の面積の新田開発が可能である<sup>24)</sup>。こうした蝦夷地開発論は、平助のそれとは趣を異にするが、『風説考』が幕府中枢にもたらした刺激の所産ではあったことに疑いはない。

松前藩が禁制し、のちの明治政府も事実上排除したアイヌ人の稲作農業へのアクセスがこのとき可能になっていればと想像する。田沼時代の蝦夷地開発論は幻に終わったが、これが現実のものとなっていけば北海道とアイヌ民族の近世史はずいぶん異なった様相を呈していたであろう<sup>25)</sup>。

## V 鎖国と開国のはざま

『北方未公開古文書集成』第三巻には赤蝦夷風説考が収録されているが、これに解説を付した和田敏明は、『赤蝦夷風説考』の出版が口火となって往時の江戸に「北方文献ブームが出現したかの観を呈した」と述べる<sup>26)</sup>。林子平、佐藤玄六郎、最上徳内、本田利明、羽太正養、大原左金吾、桂川甫周、大槻玄澤、間宮林蔵、高橋景保、18世紀末から19世紀初頭までの四半世紀のうちに彼らが著した書物には、おおむね次のような特徴があったと和田は言う。多くの著者が親露派もしくは知露派であって、幕府の祖法たる鎖国が限界にきているがゆえにロシアの求める通商要求を認めるべきだとする方向に傾いていた。こうした見識は主として、彼らの蘭学の素養がもたらしたものだとも和田は言う。こうした論客の多くがロシアの南下を警告し、国防を説くとともにロシアに対する開国を促した<sup>27)</sup>。国防と開国は一見矛盾するかに見えるが、彼らの脳裏では互いを補完する政策と考えられていた。

松前初代藩主、松前慶廣が慶長九（1604）年に家康から「黒印の制書」<sup>28)</sup>を下賜されて以来、蝦夷地は松前藩の手薄な支配下にあり、18世紀になると東蝦夷地、西蝦夷地の海岸線に点在

24) 『北門叢書』第一冊、p.118。この書付全文は『新北海道史』第七巻史料一、1969年、pp.329-31にある。

25) このとき蝦夷地開発が挫折した事態を、松浦武四郎研究で著名な秋葉実は、ある講演で「これは高倉先生なんかもずっと前から言っておられたことなんです、田沼意次の政策がそのまま続けばよかったです」と述べている。高倉先生とは北海道史研究の泰斗高倉新一郎である。田沼政権があまりにも悪評高かったため、政権と運命を共にして沈んでしまった蝦夷地開発案も、これまでその挫折を惜しまれることは少なかった。大石慎三郎は、『田沼意次の時代』に「つくられた悪評」という一節をたて（pp.37-56）、1915年に出版された辻善之助『田沼時代』によって後世に広められた悪評の史的根拠が案外薄弱であったことを説得的に論じている。そうであれば、天明の蝦夷地開発案の挫折ももう少し惜しまれて然るべきだったのかもしれない。

26) 『北方未公開古文書集成』第三巻、p.8。

27) 同上、p.9。

28) 『松前町史』通説編第一巻上、pp.352-53参照。

する「場所」には商人たちが入り込み、アイヌと取引をおこなう場所請制が広まる。場所は商人たちが松前藩家士たちの商場<sup>あきないば</sup>支配を代行する舞台となり、ときにロシア人も介在して抜け荷が横行していたと言われる<sup>29)</sup>。

当時、ロシアの影響は少なからず蝦夷地と、さらには松前和入地にまで浸透していた。奥蝦夷のアイヌの間にロシア風の帽子や外套が流行っていたとか、松前の人々が鎖国の禁を犯して密かにロシア人と商売をしているといった記述を見出すのは難しくはない<sup>30)</sup>。大原左金吾『地北寓談』には、旧暦七月の松前城下の祭りで、ロシア風の服装をまとった男女が三絃太鼓を以って一晚中歌舞したという記述や、松前藩主すら赤夷（つまりロシア）のごとき衣服を着て野外に出たという記述がある<sup>31)</sup>。また、1776年に初めて蝦夷地絵鞆の入江（現在の室蘭港）に来航したイギリス軍艦プロヴィデンス号のプロトン艦長は、翌年当地に二度目の来航を果たしたとき、松前藩の使者たちから「ハコダテにロシア人が商いにやって来る」と聞いたことをその航海記に記している<sup>32)</sup>。

松前藩の意のままに蝦夷地を放置しておけば、ロシアの浸透は止まらない。かと言って、国防策で蝦夷地全体を守ることは不可能であったから、山丹やロシアとの交易を公認することで蝦夷地交易を幕府の管理下に置き、アイヌへの略奪的支配を緩和して彼らを日本の影響下に留める、そのようなプランが彼らの念頭にあったように思う。

『風説考』で工藤平助も対ロシア交易の公認を主張した。平助のこの説を端的に開国論と呼ぶのは少しためられる。その理由を最後に述べておきたい。『風説考』で工藤平助は、ロシアとの間に「一通りの交易路を確立しておくことが望ましい」とした上で、次のように述べている。

交易路を開いたとき、種々留意すべきことはあるが、その第一は適切な要害を設けることである。そして第二は抜け荷を禁制することである。このまま放っておくと

---

29) 抜け荷の噂はさまざまな文献に記録されているが、ここではとりあえず『風説考』本文の記述を参照されたい。本文 p.124、125 など。また、次の注 30 を参照。

30) 例えば中村真一郎『蠣崎波響の生涯』、新潮社、1990年、p.84、また、片山杜秀『尊王攘夷—水戸学の四百年』の第四章の二「水戸学の蝦夷地探検」および「ロシアについて」の節、pp.237-54 参照。さらに、享和元（1801）年の蝦夷地探検行の記録、福居芳磨「蝦夷の嶋踏」（板坂耀子編『近世紀行文集』第一巻、葦書房、2002年）の箱館に関する一節に「さきのとしより、こと国人のここにさはりあるよし」（p.74）という記述がある。「こと国人」とは異国人、つまりはロシア人などを指している。

31) 大原左金吾『地北寓談』（『北門叢書』第三冊、北光書房、1944年）、pp.331-32。この書は寛政九（1797）年頃に成立し、水戸彰考館総裁の立原翠軒の手を経て、ときの老中首座、松前伊豆守信明に上呈された。

32) W・R・プロトン（吉田俊則訳）『プロトン北太平洋航海記』、東洋書店新社、2021年、p.204 参照。また、松前藩とロシアの関係の特殊な一断面について、吉田俊則「プロヴィデンス号来航異聞—蝦夷地、松前、ロシア—」、pp.65-102 を参照されたい。

抜け荷は段々巧妙になり、…それを考慮すると、公なる交易を認めるほかに方法はない。交易が始まれば相手の人情も知れ、風土も知れ、したがって対処の術もあるだろう<sup>33)</sup>。

ヲロシヤが大国であることを恐れて交易をしないという理はない。…また、宗門の吟味なども放置しておくのはいかがなものであろうか。さて、調べが済んでからどうすべきかといえ、奉行持ちにして年々交代させるべきである<sup>34)</sup>。

第一に必要な「要害を設ける」とは、険しい地形に護られて敵の侵入を防ぎやすい港を開港地に定めるという意味で、それは「あながち蝦夷に限るものではない」とも言っているが、実際には松前や江差では松前藩の影響が強すぎるとすれば、新興の港「ハコダテ」が念頭にあったのかと推測する。そこが開港されたとき、抜け荷禁制と宗門改めの機能を新設の奉行に担わせると平助は言う。

良港ハコダテは、東西に険阻な地形が控え、要害と呼ぶにふさわしい場所である<sup>35)</sup>。享和二(1802)年、『風説考』とは少し異なった文脈においてはあったが、箱館奉行が実際にも設置された。こうした体制は、鎖国を打破すると言うよりは、鎖国下の長崎の体制を北辺の地に移植しようとするものだったと思う。とはいえ客観的に見れば、平助の提言が幕末の開国条約を先取りしていたのも事実である。

鎖国が外圧によってではなく主体的に解体されるとき、こうした一步の積み重ねがその道筋となったであろうという歴史のオータナティヴをただ想像するのみである。

---

33) 本稿 p.125。

34) 本稿 p.125。

35) 福居芳麿「蝦夷の嶋踏」には、箱館から東蝦夷地へ向かうと現れる険しい地形と困難な道行が描かれている (pp. 74-77)。また、堀淳一『忘れられた道—北の旧道・廃道を行く』(北海道新聞社、1992年)には、西蝦夷地へ向かうときの道中の険しさの記述がある (pp.49-55)。

## 凡 例

- 1 本稿の現代語訳は大友喜作（編著）『北門叢書』第一冊、北光書房、1943年所収の「赤蝦夷風説考」を底本とした（本文中では「北門叢書版」）。同じく「赤蝦夷風説考」が収められた和田敏明他（編著）『北方未公開古文書集成』第三卷（赤夷動静）、叢文社、1978年も併せて参照した（本文中では「古文書集成版」）。この二つの版はときに異なる諸点があり、その相違に無視できない意味があるときは訳注で言及している。
- 2 先行訳として井上隆明（訳）『原本現代訳〈101〉赤蝦夷風説考』（教育社新書、1979年）を参考とした。
- 3 蝦夷地の地名は、現在の地名と照合して訳注に記した。
- 4 ロシア史に関する事実関係の異同を確認することを訳注においてとくに重視し、地名、人物、事蹟など、筆者の追跡しうる範囲で現在の学界の共通理解に照らして訳注に記載した。主として以下の諸文献を参考とした。岩間徹（編）『世界各国史4 ロシア史（新版）』（山川出版社、1979年）、田中陽児・倉持俊一・和田春樹（編）『世界歴史体系 ロシア史』1-2巻（山川出版社、1994-95年）、B・O・クリュチェフスキー（八重樫喬任訳）『ロシア史講話』2-3巻（恒文社、1981-82）、[[新版] ロシアを知る事典』（平凡社、2004年）、R・ミルナー＝ガランド、N・デアフスキー（外川継男監修・吉田俊則訳）『図説世界文化地理大百科 ロシア・ソ連史』（朝倉書店、1992年）、Советская историческая энциклопедия, Т.1-16, М., 1961-76。典拠は省略しているが、とくに立ち入った説明を必要としたときには記入した。
- 5 原文中にはオランダ暦（西暦）と元号とが併記されている。その換算が不正確なときは括弧書きで正しい元号を記している。
- 6 原文の叙述中に工藤平助による注釈と思われる文章が二通りの形式で挿入されている。一つはポイントを落とした割注であるが、これはポイントを落とした括弧書きで挿入した。もう一つの形式は、ポイントを落とさずタブを下げて挿入された注釈に見える記述であるが、こちらはタブを下げてポイントを落とし、文頭にアスタリスクをつけて本文に挿入した。
- 7 ポイントを落とさない括弧書きの挿入について、原文にあるルビを拾ったものは（ ）で、訳者による意味の補足は〔 〕で挿入してある。

## 現代語訳「赤蝦夷風説考」

### 序

カムサスカとは赤蝦夷の本当の名である。つらつらそのことを考えるに、オランダの東に国があり、その名をヲロシヤという。この国の都をムスカウヒヤという。我国でムスコビヤと呼ぶのはこの国のことである<sup>36)</sup>。この国は寛文年間<sup>37)</sup>から徐々に勢威を増し、正徳年間<sup>38)</sup>に奥蝦夷「カムサスカ」という国まで切り従えた。カムサスカは日本で赤蝦夷と名付けられているが、その国ではカムサスカと自称するようである。蝦夷とカムサスカの間に千島という島々がある。享保のころから彼らはこの島々をも徐々に支配し始め、そこに城郭などを構えている。その国の人々がときどき松前の近辺に漂着することがある。オランダと国境を接する国であるヲロシヤから日本までは東に五千里、そこに奥蝦夷があり、そこまでを掌握しているという。

そこでその東進の概略を考えてみると、松前人に聞く話とオランダの書物の記述とがよく合致しているので、珍奇な物語と思い、私の拙い所見を交えて一冊の書物とした。加えて、その考察の証拠となるものを一冊にまとめ、上下二冊の書物が出来上がった。読者は上巻を読めば十分であり、下巻は読むに及ばぬことと申し上げておく。

天明三年癸卯<sup>39)</sup> 正月 日

### 上 卷

#### 赤狄<sup>40)</sup> 風説のこと

一、松前人の話を知ると、蝦夷の奥丑寅<sup>41)</sup>の方角に国があり、その名を赤狄という。蝦夷の北東の彼方の海域に千島と呼ばれる大小の島々がある。この島々から折りにふれて交易のため

---

36) ムスカウヒヤあるいはムスコビヤの呼称については注 103 を参照されたい。

37) 1661~1673。ロマノフ朝第二代皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチの時代に相当する。このときはほぼシベリア征服を達成し、東と西でロシアの版図がきわめて膨張した。

38) 1711~1716 年。ピョートル一世の時代。

39) 1783 年

40) 赤狄は、北狄（ホクテキ）の故事などからセキテキと読みそうであるが、古文書集成版では「アカエゾ」とルビが振られている（p.30 など）。北門叢書版ではとくに読み方が指示されていない。

41) 北東

人々がやって来るが、それは昔からのことである。赤狄は乾鮭<sup>42)</sup>、鯨油類その他の蝦夷物産を持ち来り、こちらからは塩、米、反物、鋳物、刃物、包丁などを渡すという交易が口蝦夷との間に行われて来たことは、よく伝え聞く話である。この人々は赤蝦夷とも赤人とも、たんに蝦夷とも呼ばれるが、総じて奥蝦夷と呼び習わされてきた。ところが近年では漂流と称して折々に蝦夷地のウラヤシベツ<sup>43)</sup>、ノツシヤム<sup>44)</sup>あたりに船が来るようになった。そのあり様は昔とは異なり、船の作りはオランダの様式で、人々の衣服もオランダ風となり、羅紗、ビロード、猩々緋の服を着て、通詞すら連れている。蝦夷語通詞、日本語通詞がいて日本語を使い、カタカナを書き、何ごとも通じぬことなしという。蝦夷語通詞も口蝦夷の言葉をよく操り、巧みに通訳する。キセルの竹管に三十一文字の和歌をカタカナで焼印したものを携帯する人などもあるという。

〔それほど日本に通じているのは〕 どうしたわけかと尋ねると、通詞は次のように答えた。昔から彼らの国に漂着する日本人がいて、彼らはその漂流民を手厚く保護して妻縁をさずけている。その結果、子孫たちは日本言葉を巧みに話すので、日本事情に精通することを家業とさせており、ヤクツコイというところに一郭を構えて漂流民とその一族を撫育しているという。我々も先祖は日本人であると彼は語った。彼らの国の名を尋ねるとヲロシヤと答えた。船中には丁字、肉桂、沈香、胡椒、砂糖などの品々が積まれ、羅紗、猩々緋、ビロード、更紗などの布地やいろいろな器もあるようであった。船中は、食器、手道具、銀器などが多く積み込まれ、美しく煌びやかであったという。

漂流とはいうものの、内心は日本との交易を希望していて、意図して流れ着いたものと思われる。〔あるとき彼らが持参したものが〕 古来より交易されて来た蝦夷産物とは異なる新規の品々であったので、交易は許さず、船は追い返した<sup>45)</sup> という。あるときは不届きにも上陸し、陣屋などを建てようとして蝦夷の人々と争いになり、飛び道具などをふりまわすなりゆきの果て、双方に死傷者が出てようやく矛を収めることすらあった<sup>46)</sup>。それらの人々は、最初に述べたオランダの風体ではあるが、容貌からすれば赤狄の地付きの氈びすどもと思われる人々で

---

42) からざけ。鮭の腸を取り除けて素乾にしたもの。

43) 現在の浦士別川が濤沸湖に流れ込む一帯を指す。

44) 納沙布岬。

45) 「追い返した」の原文は北門叢書版では「追返したるよし」(p.214)、古文書集成版では「追及したるよし」(p.30)、文脈から前者が適切かと思う。

46) 明和八(1771)年、ラッコ猟のためウルップ島にやって来たロシア人がアイヌ人たちと衝突し、戦闘に至った事件のことか。松前町史編集室(編)『松前史年表』、1972年、p.54、また、『北門叢書』第一冊の大友による解説 pp.172-73 参照。この事件について、井上隆明(訳)『原本現代訳〈101〉赤蝦夷風説考』では天明四年の出来事として訳注を付しているが、『赤蝦夷風説考』が天明三年正月上梓なので何らかの手違いであろうか。

あつた<sup>47)</sup>。いずれにしろこれらの人々は極北の海からやって来たもので、蝦夷人とはまた別の島々びすどもであるが、近年こうした振る舞いに及ぶのはただならぬことである。

また、国名をヲロシヤというのも謎である。ヲロシヤという国が万国のなかにあるかを識者に尋ねてみても、知る人はいなかったという。これについて長崎人、松前人の話を突き合わせ、オランダの書物と照合してみると、はっきりとしてきた事情もある。よくよく考えてみれば、ヲロシヤとはムスコビヤの別名であり、赤蝦夷もこれに服属したので、ムスコビヤの役人がその地に来て駐在した。そのゆえに、国名を尋ねられヲロシヤと答えたのであろう。

一、長崎人の話によれば、明和八卯年<sup>48)</sup>、異国船が漂流し、奥州の海を渡って上総の岬に漂着、その後四国阿波国の沖合にやって来て、長崎に駐在するオランダ人へ書簡を送った。異国船に国名を尋ねるとカムサスカと答え、船に乗る商人はマツリツハラダルハンペンゴロと名乗った。書簡は江戸に送られ、ご公儀はそれを長崎に転送してオランダ人に渡されたが、そのときご公儀の命あってオランダ通詞が書簡を翻訳した。訳された内容は次のとおり。ハンペンゴロ<sup>49)</sup>はドイツ国（ドイツはオランダの同類である）の人である。先年、モスコビヤとの合戦があり、ハンペンゴロはそのとき五十余人とともに捕虜となった。彼らはカムサスカへ流刑されたが、〔仲間とともに〕折をうかがい、船を盗んで脱出、東海を渡って本国へ帰還しようとしたが、意に反して日本に漂着したものである。阿波国の藩主が彼らを保護し助けた。その御恩を思い、オランダ人に書簡を送り、感謝の気持ちを伝えてくれるように依頼したのだという。

一、赤蝦夷の本国はヲロシヤである。リュス<sup>50)</sup> 国というも同じである。城下はモスコウビヤというので、おしなべてムスコウビヤとも言う。カムサスカというのは赤蝦夷の本名である。カムシカトカというのも同じである。詳しい考察は別冊に述べており、複雑で「若時<sup>51)</sup> (ママ)」

47) 下線は記者による。この下線部は北門叢書版と古文書集成版で大いに異なる。北門叢書版の原文は「此これらの人物は最初にいふ所の阿蘭陀人の様にて、赤狄の地付のゑびす共と思はるる人柄のよし」であるが、古文書集成版には「これ等の人物は最初にいふ所のおらんだ人などの様にみゆる人柄にあ<sup>ら</sup>で、古代のままの赤蝦夷の類にて、赤ゑぞの地付の夷ともおもはるる人柄のよし」(p.30、傍点筆者)とある。井上隆明訳でも古文書集成版と同じ解釈をしている。岩崎奈緒子は松平定信旧蔵本の写本をきわめて良質のものとして紹介しているが、そこにおける該当箇所原文も古文書集成版と同じである(岩崎奈緒子「史料紹介 天理大学図書館所蔵 加模西葛杜加国風説考」、pp.122-27)。下線部はとりあえず北門叢書版にしたがっているが、「…オランダ人などのような風体ではなく、古代のままの赤蝦夷に類して、赤蝦夷の地付きの夷と思われる人たちであった」と解釈するのが適切かと考える。

48) 1771年。

49) ハンペンゴロウことベニョフスキは、ハンガリーの軍人で、ポーランドにおける対ロシア武装蜂起に参加し、ロシア軍の捕虜となってカムチャッカへ流刑されたのち、軍艦を奪って仲間とともにカムチャッカを脱出した人物である。ロシアの南下を警告する有名な書簡を長崎のオランダ商館へ送った。水口志計・沼田次郎(編訳)『ベニョフスキー航海記』東洋文庫、1970年、pp.3-25, 162-63 参照。

50) 古ロシアの国名ルーシに由来する。

51) 古文書集成版では「着時 (ママ)」(p.31)。

には理解できないので、省略する。

一、赤狄のことをオランダ人に尋ねると種々の説を述べるが、とにかく日本に対して陰謀をめぐらしているという。オランダ通詞の本音はヲロシヤに対する注意を喚起したいようであり、次のように語った。天明二年<sup>52)</sup>壬寅の風説書<sup>53)</sup>にはリュス国が日本に対し陰謀をめぐらしているとある。リュスとはすなわちヲロシヤのことであり、つまりは赤狄すなわちカムサスカ国のことにほかならない。この風説書の一節には信用しがたきことがある。前後の事情から考えると、紅毛オランダとモスコビヤは近隣の国で、その関係はきわめて親密であり、オランダはリュス国に服従している属国のように聞こえる。ドイツという国も同じである。このあたりの記述には怪しきことが多い。

オランダの書物には、すでに享保のころモスコビヤの人が、王命により、オランダのカピタンを同伴してカムサスカから南日本近海の調査に赴いたという記述が見える<sup>54)</sup>。その当時オランダとモスコビヤが親密であったことがわかる。明和八年<sup>55)</sup>に日本へ「漂流」して来たペングロの航海もこれに類したことであり、我が国周辺の地勢を調査する目的で、ヲロシヤ人たちが航海巧者のオランダ人を連れて探検航海にやってきたように見える。ペングロの船を見た人の話では、縄を垂らして海の深さを測っていたという。日本の周辺海域をすべて詳しく測深したという話も漏れ聞くので、とても漂流の果てにたどり着いたとは思われない。

にもかかわらず、オランダ人が頻りに陰謀説を唱えるのには、まずもって不審を抱かざるをえない。もしそのような兆しがあったとしても、はっきりとは言うことなどできず、まして前後の事情を思慮すれば、軍隊を派遣して大合戦に及ぶとはとても考えられない。冒頭で述べた蝦夷における小競り合いは、カムサスカ土着の嶋ゑびすどもの仕業にほかならず、ヲロシヤ国の評議にしたがった振る舞いではなかったことが判明している。日本に金銀がたくさん出ることを知っているがゆえに、ヲロシヤは日本との交易を切望しているだと私は思う。ヲロシヤは、日本との交易を通じてオランダが次第に豊かになっていくのを見ている。他方オランダ側は、何としても日本と交易して利をあげたいというヲロシヤの本心を察知しており、そうなればオランダ国に衰運を招きかねないので、これから後も日本とヲロシヤの通商が実現しないことを念願している。さまざまな雑説を言いふらすのは、そのことゆえと思われるのである。

この点をさらに詳しく述べると、オランダ人が日本との交易に供するものはすべて南方の産物である。オランダは極北の国で、本国の品といえば細工物ばかりである。そうした産品を携

---

52) 1784年。

53) オランダふうせつがき(和蘭風説書)。

54) 享保年間は1716~1736。元号は異なるが、元文の黒船事件(ペーリング第二次探検隊の分遣隊としてシュパンベルグが日本近海に来航した事件)のことか。

55) 1771年。

えて海上数万里を航海しやってくるので経費もかかり、途中で仕入れる品々の値も訳あるものとなろう。他方、ヲロシヤの国は、赤狄まで地続きの版図を成し、赤蝦夷から日本までは海で隔てられているとはいえ、そこに島々が連なるので内海のごとくである。ヲロシヤの都からハルシヤ<sup>56)</sup>の地までは大河があるので自由に船で往来できる。ハルシヤ、インデヤ<sup>57)</sup>、アフリカなどの諸国はみな大河があつて船での通航が自由であり、これら諸国の産物はみなムスコビヤの都の湊に集積され、都には万国の産物で無いものはない。

さて、ムスコビヤの都からカムサスカまで、遠路といえども大河があり、自由に運漕できる。大いなる北極海へ出れば海上も自由に往来でき、みな自国の領海内を通航するので、品々を日本に送り届けることは掌中を廻らすようなものである。ヲロシヤから中国への通路は三筋あり、物産や使者の往来に困難はないので、北京口より唐物類がたくさん運漕される。そんな条件であれば商品の値段はとくに安くなる。そうなれば中国<sup>58)</sup>とオランダの長崎貿易があまり儲からないものになると懸念するがゆえに、オランダは様々なことを言いふらして我が国を欺き、ヲロシヤと日本が将来にわたり親密にならぬように振る舞うのではないか。

かつて通詞から聞いたオランダの物語では、オランダから北極海経由で日本に向かえば、その航路はきわめて近い。だが、海上には氷山が多くて航行が難しく、加えて、北韃靼<sup>59)</sup>の人々が性質凶悪で素直に通航を許すことはなく、これらを恐れて北極海航路は断念しているという。この韃靼とはヲロシヤの領内である。では日本はどう心得るべきかといえば、少なくとも一本の交易路はあつて然るべきである。昔は普通の嶋えびすだけであり、無知蒙昧の輩であつたから、いまの蝦夷人と同様打ち捨てておけばよかった。しかし、このような大国ヲロシヤともなれば、一通り防備をめぐらして備える場合でも、いずれよりも恐ろしい国にほかならない。いかなる模様かも知らずにこの大国を打ち捨てておく間に、ヲロシヤは日本人を撫育して日本語にも精通し、さらには、ハンペンゴロのような輩が海上を乗り回して我が国の地勢を調べ<sup>60)</sup>。このような現状では、彼らがどのような企みを持つかを夢にも知らず、ただ打ち捨てておくわけにはいかない。したがって、願わくば詳細なる調べをおこない、いま述べた事情に相違なしとなれば、一通りの交易路を確立しておくことが望ましい。現況ではいつまでたっても表立って対処されることはなからう。

抜け荷の実態は知れがたいと言っても、内うちに行われていることは察せられる。この抜け

---

56) ペルシア。

57) インド。

58) 「中国」の原語は「唐」または「唐山」であるが、訳文はこれ以下もほぼ中国で統一している。

59) シベリア。

60) 当時の日本でハンペンゴロの事情はあまり知られていなかったもので、工藤平助は彼をロシアの手先と疑っている。詳しくは注49を参照。

荷の取り締まりは難事であるにちがいない。さて、交易路を開いたとき、種々留意すべきことはあるが、その第一は適切な要害を設けることである。そして第二は抜け荷を禁制することである。このまま放っておくと抜け荷は段々巧妙になり、どれほどの品々が出ていってしまうのだろうか。それを考慮すると、公なる交易を認めるほかに方法はない。交易が始まれば相手の人情も知れ、風土も知れ、したがって対処の術もあるだろう。

因みに、蝦夷には金山がたくさんあると世人は言う。昔、私の親の友人が金山開発を志して力を尽くし、蝦夷の砂金だとして付け届けてきたのを見たこともある。また、松前人の話を聞くに、松前でも昔から金山が営まれ、私の知人の親も役職について蝦夷地金山の仕事をしていた。昔は芝下〔土中〕の金も多かったが、いまは砂金が水中より採れる。とても場所が悪いので、出る金も経費に足りない。そのほかに銀山や銅山もあるが採算がとれず、採掘することはないと聞く。あらましを聞いたただけなので、確かな話ではない。それもあるかと思うに過ぎない。もし〔金山開発を〕真剣に考えようとすれば、調べて見届けておきたい事柄ではある。

本当に金銀銅が採れるならば、金銀を採掘し、これを以ってヲロシヤと交易し、その利益を使って山へ採掘に入る。そうすれば、どれほど費用がかかろうとも将来性はあろう。敷衍すると、ヲロシヤよりの物産、薬種類がこの国にもたらされるとすれば、それは蝦夷の金銀銅の見返りであるから、国家の純粋な潤いとなる。また、中国・オランダとの既存の交易に関しても、我国とヲロシヤ間に交易あることを知れば両国の心の励みとなり、諸色の値段もとくに下落し、銅の流出も減少する。また、ヲロシヤ交易の値段を中国・オランダ貿易の値段と比較すれば、商品の本当の相場、年々のその推移なども正確に知ることができる。これまで中国が俵物を欲してきたのは国が近くにあるためで、ヲロシヤが俵物を好まないのは国が遠いためである。ヲロシヤは大国でその城下は遠国であるが、カムサスカは近国である上に極北辺境にあり、我国の俵物、米、酒、塩の類は命懸けで欲しがらるであろうから、交易が始まれば俵物を差し出すだけでも大方商売は成り立つであろう。とはいえ、ヲロシヤの本心はやはり我国の金銀銅を狙うにあり、カムサスカの地付きの嶋糸びすの思惑とは格段の違いがあることは見極めておくべきである。

たとえヲロシヤとの交易が成立しなくとも、蝦夷の金銀銅を中国やオランダとの交易に用いられれば、それは国の掛け値なしの潤いとなる。したがって蝦夷の金銀銅は、採掘の費用が引き合わないと捨ておくべき資源ではない。いずれ我が国を豊かにしようと思えば、この手段に如くものはなからう。

ヲロシヤが大国であることを恐れて交易をしないという理はない。調べなければ知ろしめされぬとは道理である。調べなければ安心もない。また、宗門の吟味なども放置しておくのはいかなるものであろうか。さて、調べが済んでからどうすべきかといえば、奉行持ちにして年々交代させるべきである。交易の場所も細かく吟味しなければ、どこが適所かは知りがたい。こ

のままに放置しておけば、年々抜け荷は増大していく。とにかく毎年ヲロシヤ人が到来するのを見るし、利を好むのは人情であるから、抜け荷の倍増は不可避であろう。蝦夷口の抜け荷は抑止しがたい。松前藩だけでは禁制の下知も行き届かない。松前の産物買い付けのために諸国の者たちがいつも入り込んでおり、抜け荷の売り捌きは八方にひろがる。彼らが東海<sup>61)</sup>の海路を覚えて琉球と交易するようにでもなれば、事態はさらに制御しがたくなるやもしれない。

オランダ書を読めば、ヲロシヤが日本交易を望むのは数十年来の宿願であり、なんとしても交易を開きたい意思があるように思う。こうした次第で、いずれにしろ奉行を置いて交易を管理させる以外に抜け荷禁制の手立てはない。むしろこの状況を奇貨として、日本の富栄を追い求めんために、とにかく蝦夷の出産物を吟味しておくに越したことはない。蝦夷地の金銀銅を使えば、我国に入用な薬種などを入手できる。これによって毎年異国に流出する銅が節約され、抜け荷禁制の法令が行き届くならば、数十年のうちに富国の実現することは掌を指すごとく明らかである。すべて国を治めるときの第一の要諦は、国の力を厚くすることである。国の力を厚くするには、とにかく外国の財貨を自国に引き入れることが一番である。だが、我国に外国の金銀銅をもたらすか否かは、ひとえに外国人自身がその心の赴くままに行う努力に依存しており、我国の側の心がけによらぬ骨折りなのであるから、とても及ばぬことなのである<sup>62)</sup>。

さて、日本の力を増すには蝦夷の金山を開き、その産出量を増大させるに如くはない。蝦夷の金山を開くとは昔から山師どもが言いふらしてきたことではあるが、経費と出来高が引き合わず、そのため廃れてきたものである。しかるに、いま述べてきたヲロシヤとの交易が始まれば、その力を以って開発を進めることができる。この開発と交易の力をかりて蝦夷全体を服従させれば、金銀銅に限らず一切の産物が我国の必要の助けとなろう。そしてこの交易の場所はあながち蝦夷に限るものではない。長崎をはじめとして、要害の湊であればどこでもこれを引き受けてよい。

以上に申すとおり、日本の国力を増大させる方途は蝦夷開発に如くはない。また、このまま蝦夷を打ち捨てておき、カムサスカの者どもが蝦夷地と一体になれば、蝦夷もヲロシヤの下知に従うようになり、もはや我国の支配を受けつけなかり。そうなればいかに悔やんでも取り返しはつかない。下々の様々な風説によれば、東北蝦夷は段々とヲロシヤに懐いて従っていると聞く。これが事実であれば、一旦ヲロシヤに従えばもはや我が国の力は及ばず、これまでの状況に留めおくことすらできないと思う。これまでのとおり交易を開かないままであれば、どんな事態が出来るかは予想もつかない。既に述べたとおり、我国の力を増進するのに蝦夷に如くものはない。だからこそ心を尽くすべきなのである。国益増進をどのように考えても、国

---

61) 東シナ海か。

62) 下線は記者による。下線部は少し読解に難のある箇所、翻訳には相当私の解釈が混じっている。

内の施策ばかりを工夫しては、捗々しく進むことはない。まして、状況が徐々に変わろうとしている今、事態を放置できぬ時節となったというべきであろう。

抜け荷禁制のことは小生かねがね提言してきたことである。ロシアが関与する抜け荷は、これまでの方法ではどうしても禁制することはできない。いずれさまさまの角度から究明し糺したいのは、蝦夷の金山とロシアの動向にはかならない。蝦夷の金山より百両の金を掘り出してロシアの千両<sup>63)</sup>の品々と交易すれば、長く採掘を続けることができる。この書での私の提言はつまるところこの点に尽きる。

とはいえ、千両、二千両の産出高では一年間の取引額には足りないので、中国やオランダとの取引に間に合うほどに採掘するとなれば、必ずしもうまくいかないのかもしれない。蝦夷の金山の掘方に関していえば、他の金山とは異なる事情がある。蝦夷地では金銀が通用せず、掘方たちはただ米、酒、塩、タバコ類ばかりを好むので、経費といっても金銀は使えない。金銀の給付は内働きの人々への給金が必要なだけで、これとて地付きの蝦夷人を交えて働くので、蝦夷人への給金はみな俵物であり、正金は必要とならない見込みである。それゆえ、経費が多くかかったとしても、産出高をもって交易金の助けとしうるのである。

## 附 録

### 蝦夷地に東西の区別あること<sup>64)</sup>

一、松前城下から東、丑寅の方角<sup>65)</sup>に浅間（センゲン）という名の大きな山がある<sup>66)</sup>。近辺では随一の大山であり、古来より金銀が多く産出されるという。松前家のご先祖がこの地に渡ってきたとき、諸国より入り込んでいた金掘りどもを残らず追い払った。そのあとに高さ数十丈の屏風のように切り立った場所があり、これを切り通しという。この山から東西に連なる山々には残らずみよし掘りの跡が残されている（みよしとは砂金のことである）。

63) 北門叢書版 p.222 では「十両」と書かれているが、古文書集成 p.36 には「千両」とある。

64) 蝦夷地は次のように定義されていた。「西は熊石、東は亀田、両所に関所ありて、是より外は蝦夷地とす。…故なくして蝦夷地への往来を禁ず」（『北海随筆』、木村礎編『藩史大辞典』第一巻（北海道・東北編）、雄山閣、1988年、p.3参照。この和入地と、そこから東西の海岸線に沿って伸びる東蝦夷地、西蝦夷地が松前藩支配地であり、内陸部はその外にあった。太平洋岸を辿る東蝦夷の果てに千島列島があり、日本海側を辿る西蝦夷の果てには樺太（サハリン島）があった。場所請制度と巡見による松前藩の蝦夷地支配の実態については、平山裕人『アイヌ地域史資料集』、明石書店、2016年などを参照。

65) 北東。

66) 大千軒岳、標高 1072 メートル。

一、この浅間の山続きで、城下より九里ほどのところに尻内という温泉<sup>67)</sup>がある。そこは松前家六代前のご先祖のときにみよし金が大量に出て、およそ数十万両の金を掘り出した場所である。その結果、当時は藩の家士たちへの歳暮の祝儀として、砂金十匁が下賜されたという。のちになっても、このことを先例として、歳末の祝儀に青銅十匁が配られた。それは古いしきたりの名残だという。

一、松前城下より東へ二十五里ほど行った先に箱館と申すところあり、諸国より廻船が入り込む湊である。箱館よりさらに東にエサン<sup>68)</sup>という大山がある。この山は銅山であり、硫黄、明礬<sup>69)</sup>なども産出する。そこは箱館の町人白鳥新十郎と申す者が先年より採掘していたが、近年は休業している。

一、エサンから三十里先のユウラップという地にクヌイという川がある<sup>70)</sup>。この川の河口より三里ほど上流にみよし金が出る。先年松前家がこの場所でみよし金掘りをしてしたが、金はふんだんにあるとはいえ、採掘法に通じていなかったゆえに多くは採れず、休業していた。宝暦年間に江戸の町人山城屋安右衛門と申す者がこの場所の開発を願い出たため、小人目付矢澤友蔵殿と宇佐美甚右衛門殿ご両人が幕命でこの場所を見分なさったが、何らかの事情からその場所は除外されてしまった<sup>71)</sup>。ここはいたって砂金が多く、その川上にはユウバリと申す大山<sup>72)</sup>があり、これは金山である。シコツノユウバリという。その山からクヌイならびにセタナヒ<sup>73)</sup>と申すところ両方向へ川が流れ下っている。

一、クヌイより東にサル<sup>74)</sup>と申す地がある。そこは松前城下から百五十里ほどの距離にある。ここは古来金掘りども数千人が入り込み、数千軒の家が立ち並んでいた。

一、それより東にエリモ<sup>75)</sup>と申すところあり、古来よりそこに金掘りども諸国より入り込んでいたが、蝦夷蜂起のとき、盗掘者百人を松前家が仕置きし、処刑に及んだ。その場所を百人

---

67) 知内温泉。

68) 恵山、標高 618 メートル。

69) 明礬は、幕府の専売所（明礬会所）が置かれるほど重要な産品で、薬、火薬、染め物などに広く利用されていた。

70) 遊楽部と国縫川だとすれば、位置関係の理解はいくぶん不正確である。恵山から三十里という記述は国縫川の位置と合致しているが、今日の遊楽部の位置とは少し一致しない。

71) 明和三（1766）年、山城屋の願い出を受けて江戸幕府が小人目付二人を派遣して調査したが、得るところがなかった。『新撰北海道史』第二巻、通史一、1937年、p.129 参照。

72) 夕張岳、標高 1668 メートル。クヌイと夕張岳の位置関係はあまり正確には記述されていない。蝦夷地に関する松前藩の地理的知識はほぼ海岸部に限られ、内陸部の正確な地理は未だ知られていなかった。このあたりの記述はそのことを反映しているのであろう。

73) 瀬棚。

74) 沙流川流域。沙流川は日高山脈に発し現在の日高町富川付近で太平洋に注いでいる。

75) 襟裳。

浜<sup>76)</sup>という。そこは大いに金が採れる場所と伝えられている。それより先は段々と山も低くなり、東蝦夷の渡口に近い。そこはアツケシ<sup>77)</sup>に近く、赤蝦夷はこのアツケシと申すところに渡ってくるという。

### 西蝦夷地のこと

一、松前城下より三里ほどの赤神と申すところに鉛鉱山がある。それより西のキヨベ<sup>78)</sup>と申すところ、ここは銅鉱山である。

一、それより六十里先にスツキ<sup>79)</sup>と申すところあり。古来金掘りが多く入り込んだところで、今日までその痕跡が残っている。

一、城下より百五十里先に石狩と申す大河がある。この川を七日ほど遡ればユウバリ山に近い<sup>80)</sup>。

一、それより西に百里ほどのところにマシケ<sup>81)</sup>という地があり、その浜つづきのハボロ<sup>82)</sup>と申すところはみよし金が採れる。先年、松前家の家臣野村與五右衛門と申す者、藩命により採掘に向かったが、その仕事にはなはだ不案内であったため採掘に失敗した。これはまったく金採掘の技術を知らなかったからだと言われている。採掘技術に通じた者であれば何とか手段を見つけたのであろう。

\*以上は人から聞いた話を記録したものである。金山にはまったく知識がないので、確かなことは知りたい。最初に述べた交易の工夫こそがまずもって必要であり、まずはそのあらましなりとも記述し、のちの考察の助けとする。

天明三年正月 上 終

---

76) 地名由来の諸説の一つ。蝦夷蜂起とは1669年のシャクシャインの乱を指すと言われる。他に南部藩御用船が難破して多くの犠牲者が出たことに由来するなどの説が語られている。

77) 厚岸。

78) 清部。

79) 狩場山地に発する須築川の流域。現在は河口部に須築(すつき)の名がつく漁港がある。

80) 夕張岳は、現在の江別市で石狩川に合流する夕張川を遡行した位置にある。

81) 増毛。

82) 羽幌。

## 赤蝦夷風説考

### 下 卷

#### カムサスカ・ヲロシヤ私考のこと

一、赤蝦夷の国をカムシカツトとも、カモスカトクとも言うこと、江戸の好事家たちや長崎人などが昔より言い習わしてきた。その根源は萬國地図の中国語訳に加模西葛杜加（カモシカトカ）とあるからで、この国のことをオランダ文字でKAMISCHATKA（カムスカトカ）<sup>83)</sup>とあるのをそのまま拾い、仮名に翻訳して加模西葛杜加と書いた。これは、中国人がオランダ語ラテン文字の読み方を知らなかったためである。カムスカの文字をひとまとめに読めばカムサスカというように聞こえる。すべての外国文字は国によって発音が異なるため、確かなことは書きがたい。

ムスコビヤとオランダとは隣国ではあるが、多々異なる点があり、中国と日本であればなおさらである。たとえば郭公の鳴き声を聞いて、ほんぞんかけたかと書いたり、てんぺんかけたかと書いたり、また、不如帰とも郭公とも呼ばれるが、みな聞く人の心によるもので、どれもホトトギスの声の調子を正しく再現していない。このことはカムサスカの場合にも当てはまり、松前人の耳にカムサスカと聞こえたので、それを元に彼らはカムサスカと記述したが、確認あることではない。日本ではホルランデヤをオランダと聞き、中国では和蘭(ワウラン)と聞き取ったようなものである。とすれば、カムサスカと記してもよからう。

万国地図を見るかぎり、カムサスカの地が赤狄であることは明らかである。そうであれば、赤蝦夷はカムサスカという国だと知るべきである。この国はアメリカ<sup>84)</sup>の域内にありながら、その種族は蒙古(モンゴル)なので、カムサスカという蛮名をもって国号とするのも道理である。このように昔からカムサスカという呼称が使われてきた。だが、その国名を尋ねればカムサスカとは言わずしてヲロシヤと答えること、なぜなのかは松前人も知らない。さらにまた、いかなる理由で日本人を撫育し、その子孫たちに通詞を家業とさせているのかは謎である。前段の説明とオランダ書の諸説を考え合わせてみたところ、この問題はさらに究明すべきことに違いなく、博学の士に密かに尋ねて以下の知見を得た。

一、国名をヲロシヤというその根本を調べてみると、オランダ書のうち、1744年（オランダは開關以来一年二年と数えるのみで、元号はない。1744年は延享元年である。現在の天明元年は1781年に

83) 括弧内の三箇所の振り仮名は北門叢書版にはなく、古文書集成版 p.39 の原文のルビからとった。

84) 北門叢書版では「亜墨利加」p.227、古文書集成版では「北亜墨利加」p.40。

あたる) 出版の「ベシケレイヒング、ハン、ルユスランド」<sup>85)</sup> (これは書物の題名で、ルユスランド国のことを記述する書という意味である。ベシケレイは記述の意、ハンは「の」の字にあたる助詞) と、1769年、明和六年出版の「ゼラガラーヒ」<sup>86)</sup> (万国の地理を記す書の意) の二冊を参考にすれば、RUSSIA (リュツシヤ) という国である。しかるに、松前人はその耳に聞こえるままにヲロシヤと書き記した (これだけでは分かりがたい。口伝ではあるが別論もある)。リュツシイン、一名ルユスランドというこの国の都は、ムシクバまたはモスコヒイン、あるいはモスコビヤまたはムスカウという。これすなわち本邦で昔から語り継がれているモスコヒヤのことで、その国名がヲロシヤであることを知るべきである。

ヲロシヤ国は古代においてはヨーロッパの域内にあったが、徐々に勢力を増して、いまは東西百七十度あまりにまで膨張し、世界全体の一半を領有している<sup>87)</sup>。西ではヨーロッパの隣国を蚕食し、東ではアジアの韃靼<sup>88)</sup>の故地であるシベリアを北極海に至るまですべて征服した。北アメリカでは赤狄の地カムサスカヤ、赤蝦夷から口蝦夷まで連なる島々、さらには奥蝦夷カラフトの北、サガリイン島までの一帯<sup>89)</sup>を掌中におさめて、各地に代官を置き、街道を通し、河川通行を開いて海船を送り、きわめて大きな利益を得ている。一帯は古来、大辺鄙の地であったが、赤蝦夷<sup>90)</sup>に限らずみな大変豊かになったという。

85) ベシケレイヒング・ハン・ルユスランド (Beschrijving van Rusland) 「ロシア誌」。これは通称で、原典名は以下のとおり。Oude en nieuwe staat van't Russische, of Moskovische Keizerrijk; behelzende eene uitvoerige historie van Rusland en deszelfs Groot-Vorsten, Utrecht, 4dln, 1744. 佐藤昌介「洋学の思想的特質と封建批判論・海防論」(沼田次郎・松村明・佐藤昌介(校注)『日本思想史体系 洋学』上巻、岩波書店、1976年)、pp.631-634 参照。佐藤は、オランダ語を知らない工藤平助のために、親交のあった蘭医前野良沢が翻訳したと推測している (p.633)。またこの本の来歴については、岩崎克己「ベシケレイヒング・ハン・ルユスランドの流轉と翻譯」(1)(2)、『書物展望』11-11,12、1941年に詳しい。

86) 地理学を意味する Geografie. Johann Hübner, Algemeene Geographie, of beschrijving des geheelen aardrijks, Amsterdam, 6dln. 1769. 佐藤昌介、同上、p.633。同じ箇所佐藤は、大槻玄澤と桂川甫周がこの書を翻訳し、工藤平助が利用したと推測している。また、岩崎奈緒子『近世後期の世界認識と鎖国』、pp.57-58を参照。またこの本の来歴については、岩崎克己「ゼオガラヒーの渡来とその影響」、『書物展望』10-12、1940年に詳しい。

87) ロシアは17世紀後半にはすでに最大版図に達していた。したがって、経度にして「東西百七十度あまり」という認識はほぼ正しい。

88) ユーラシアのモンゴル・トルコ系諸族の中国文献における名称。故地はしたがって中央アジア・モンゴルなどシベリア全体に広がっていた。

89) 現在のサハリン島周辺は18世紀には未解明の海域で、日本でいうカラフトとサハリンが同一か否か、島か半島か、蝦夷地とはどのような位置関係にあるかなども知られていなかった。18世紀末にこの海域の本格的探検を行なったイギリス軍人 W・R・プロトンの航海記に「タターリア」探検の詳細が描かれている。『プロトン北太平洋航海記』、pp.220-233 および「解説」Ⅷ (タタール海峡、沿海州、朝鮮半島、pp.32-36) を参照。

90) 北門叢書版には「赤蝦夷」とあるが、誤記であろう。古文書集成版では「アカユリ」と書かれている (p.41)。

それゆえ万国の物産で無いものはなく、赤蝦夷の船に珍品あること、こうした事情からも想像にかたくない（以上はゼラガラーヒに記された説）。

さて、赤蝦夷の人に国名を尋ねればカムサスカとは言わず、ヲロシヤと答えること、その訳は以上に述べたとおりである。ベシケレイ（書物の名）によれば、衣服の製法について、ヲロシヤ古来の服装は便利ではないので、ことごとく改めてホウゴドイツの衣服を用いるようになった（ホウゴはオランダの本国で、ドイツ帝号を称する大国である）。そのほかの制度は、しばしばオランダの風に倣って改めたという。文字は横文字で、キリイキス<sup>91)</sup>とスラホニヤ<sup>92)</sup>の二国の文字を用いているが、その発音<sup>93)</sup>は本国の風俗に倣っていて、かの二国とは異なるという。詳しくは、以下に述べるヲロシヤ年代の記事と図説を考え合わせてご理解いただきたい。

一、赤蝦夷の風土記は蝦夷人にも松前人にも知られていない。オランダ書『ゼラカラーヒ』によれば、この国はじめは無人の島であった。韃靼地方にモンゴルという国がある。数百年前にこの国がカムサスカへ人を蒔いた。

\*調べてみると、モンゴルの発音ではモングルと聞こえ、唐音ではモンクとなる。つまりモンゴルはこの国の本名であるが、中国において文字にしたとき蒙古と書いた。方角も合致しているのでここに記すが、さらに検討の余地がある。人を蒔くということは、外国ではしばしば見られる。無人島に植民することである。罪人男女を遣わして国を開くなどのことかと思われる。

アミルという川<sup>94)</sup>があり、モンゴルからカムサスカに通じている。

\*アミル川は別名サカリイン川、シベリアに始まり、蝦夷の北の大きな入り海に注ぎ込む大河である。モンゴルからカムサスカへは繋がっていないとの説は疑うべきである。モンゴルはシベリアの国である。詳しくは後述する。

\*オランダ暦 1713 年、我が方の暦で正徳四（三）年のころ、カムサスカがはじめてヲロシヤに服属した。1730 年、享保十五年に一度反旗を翻したが、ほどなくヲロシヤの支配下に戻った。それ以来毎年貢物を納めている。人頭ごとに獣皮を一枚貢ぐという<sup>95)</sup>。

一、カムサスカに火山があり、ときどき灰を降らす。地形は中程が狭くくびれて、そこに大山がある。この頂きに登れば左右に海が見えるという。古代より日本と交易をしており、干魚（乾

---

91) ギリシア。

92) スロベニヤか。

93) この箇所原文「其昔」は誤記と思われる、「其音」として解釈した。古文書集成版では「その音」となっている (p.41)。

94) アムール川。

95) ヤサーク (ясак) と呼ばれた毛皮税。シベリア先住民たちがロシアへの服属の印として、所定の量の毛皮を原則として年 1 回貢納した。

鮭)の類、鯨油などを日本にもたらし、こちらからは砂糖、脂、米、鋳物(刃物の類か)などが出された。

\*以上が『ゼヲカラーヒ』の説明である(これは松前人の話ともよく合致している)。

一、人間は背が低く、顔の色薄赤くて黒く、頭髮は黒い。顔の幅が広く、鼻は尖り、目は窪んで眉が薄い。腹は大きく垂れ、手足は痩せている。肩幅は適度に広い。手づかみで食べ、手を洗うことはない。住居は小屋で、四策五策(足のたけを一策という<sup>96)</sup>)の深さに土を掘り、窪地とする。そこに四本の柱を建て、上に二階をつくる。外壁は土で塗り固め、二階の上部に四角い穴をあけて上窓かつ煙出しの戸とする。漁撈を第一の生業とし、魚皮を衣服とするが、さまざまな獣皮も着る。顔を塗り、唇は残す。女は残らず黒く塗る。銀の環を耳にかけている。日本では彼らをヲクエツと呼ぶ(以上はゼヲカラーヒの説)。これは赤狄の古来からの人物描写であり、ヲロシヤ人のそれではない。

一、蝦夷の果て、カラフトの北にサカリインという大きな島がある。日本の九州ほどの広さもあるうか。この地もヲロシヤ領だという。蝦夷の地図を見れば、蝦夷の真北の海域には瀬戸、難所が多く、航路はないと言われている。この難所、人々が知らないのも無理はない<sup>97)</sup>。今の中国とヲロシヤの境にサカリインという海のごとき大河<sup>98)</sup>がある。その河口にあるので島の名が付けられた。以上はゼヲカラーヒに記述された説である。この説にしたがえば、大河サハリインは韃靼の地の中国近くにある川で、カムサスカには通じていないというが、これは疑うべきである。ただし、地図にある入り海を渡ればカムサスカの西浜は近く、便利である。とはいえサカリインをカムサスカと同じ国と見て、このように記述するべきかは熟慮すべきであろう。

一、クナジリ、エスツルツ、ヒユウツルへ<sup>99)</sup>、この三つを合わせて日本では蝦夷と呼ぶ。これはゼヲカラーヒの説である。クナジリという島は蝦夷にある以外に考えようがない。このあたりの文意は解釈しがたい。

一、蝦夷よりカムサスカまでたくさんの島々が連なる。島々は、カムサスカに近いものはカムサスカに属し、蝦夷に近きは蝦夷に属する(以上はゼヲカラーヒの説)。

\*以上のごとく考えると、蝦夷を取り巻いてカラフトの端から、西北より東にいたる地域がすべてヲロシ

---

96) 古文書集成版では「策」ではなく、東の字が使われている(p.42)。

97) 古文書集成版には「この難所の沖にて一、二百里をへだつるとおもはるるゆへ」(p.42)とあるが、北門叢書版にはなく、脱漏か(p.231)。

98) アムール川のこと。

99) 国後、択捉島、得撫島。

ヤ領ということになる。恐るべし。去る安永九年<sup>100</sup>に漂着した紅毛船<sup>101</sup>に塩引、鮭子、籠鮭<sup>102</sup>などが大量に積み込まれていた。これらは航海中の食料である。鮭は外国にはないものなので、日本人がこれを贈ればとても喜ばれ、珍重される。だが、それらは赤狄から調達したものと思われる。

### 「ヲロシヤ」の記事、一名ムスコビヤ

一、RUSSIA（ルユツシヤ） オランダ文字が記すところは、このようにルユツシヤである。しかしながら、前述のとおり松前人は彼らの聞き取りにまかせてヲロシヤと書き記す。一千年以上の歴史を有する国、王号を称する国である（ここ読み難し）。王城のある都をムスカウと称す。それゆえこの国はムスカウビヤとも呼ばれる<sup>103</sup>。ヨーロッパの国である。

\*ムスコウビヤの字は国名の下につづく語勢の助語の熟字なり。アカサタナハマヤラワの音を上の勢に付して称するなり。すなわちムシクワなり。この段ベシケレーイ、ルエスランドの説。ゼヨカラーヒと異同あり<sup>104</sup>。

オランダ暦 1511 年、永正八年、帝号を称す<sup>105</sup>。それより次第に強国となっていった。中興の祖は神明の英主ペーテル・アレキシウイツツ<sup>106</sup>である。この人は大事業を成し遂げた。数代前からロシアはすでに帝号を用いる国であったものが、この人のとき格別の勲功ありという

---

100) 1780 年。古文書集成版では安永五年と記されている。

101) 紅毛は他の箇所ではオランダと訳している。したがって紅毛船はオランダ船と訳すべきであるが、この記述に関しては一般に西洋船、とりわけロシア船を意味している可能性が高いので、紅毛船のままとした。1770 年代には通商を求めてロシア船が千島に来航する事件が何度か起こった。『松前史年表』、また、『松前町史』通史編第一巻下の第四編第一章などを参照。

102) 子籠り鮭のことか。塩引鮭の腹にその卵を塩漬けにして入れたもの。

103) ムスカウとムスカウビヤはそれぞれモスクワとモスコビヤのこと、後者はモスクワが都となったモスクワ大公国の呼称として、ヨーロッパで中・近世に用いられた。

104) ここの注釈文は訳者にはその意味が取り難く、北門叢書版の原文のまま掲載した。古文書集成版では一文の冒頭の部分が「ムスコウビヤか。ヤの字は国名の下につく語勢の熟字なり」(p.43)となっている。

105) 1511 年前後のロシア史を探ると、ヴァシーリー 3 世がモスクワ大公となり、諸国併合を推し進めた時期にあたる。イヴァン 3 世がツァーリの称号を使い始めた時期や、ヴァシーリーが大公位を襲った 1504 年、イヴァン 4 世が正式にツァーリの称号を使い始めた 1547 年とも、「1511 年、…帝号を称す」という記述は符合しない。

106) ピョートル 1 世、アレクセーヴィチ、在位 1682 - 1725 年。

ことで、あらためて尊号を得た<sup>107)</sup>。尊号の字義は「祖国の父」、「全ロシアの皇帝」である<sup>108)</sup>。この尊号を祝して大宴会が催され<sup>109)</sup>、このときヨーロッパ諸国からも祝いの貢物が届けられた。オランダの人々もみな帰伏して、隣国のよしみをなした。さりながら、オランダ人はこれとは別に本国ハウゴドイツの属国であったから、ロシアに服属することはなかった。

\*以上は享保七年<sup>110)</sup>の出来事である。ハウゴドイツは冒頭で述べたハンペンゴロウの生国で、ドイツという国である。ドイツとロシアが争った記録は少しもない。こちらも帝号をまとう国であり、代々ロシアの隣国として友好を保ってきたように見える。オランダ人の説は怪しむべきである。ロシアの国民はこのペートルを神仏のごとく敬慕し、つねにペートル大帝と呼称している。

## 年代のこと

ペートル大帝の父はアレキシウミハイレヴツ<sup>111)</sup>という。ペートルはその子である。1670年、寛文十年、ミハイレヴツが崩御した。長子フートル<sup>112)</sup>がこれを継いだ。1683年、天和五(三)年に亡くなる。在位8年、子はいなかった。その弟イハン<sup>113)</sup>がこれを継いだ。イハンはずなわちペートルの伯父にあたる<sup>114)</sup>。だがイハンにはもともと癩癩の持病があり、加えて眼を患い失明の恐れすらあったので、同年、ペートルに譲位した<sup>115)</sup>。ペートルはそのとき10歳で

---

107) 従来からの帝号はツァーリであったが、ピョートルは1721年全ロシアの皇帝(インペラートル)の称号をロシアの元老院から贈られた。この称号はその後次第にヨーロッパ諸国にも承認され、いわゆるロシア帝国が始まった。田中陽児・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史体系 ロシア史』第二巻、pp.46-47参照。

108) これに続き、尊号を分解してその意味を付した以下のような記述があるが、ほぼ意味をなさないので本文から省いた。「父(ハアテル)、之(テテス)、本(ハアラル)、国(ランド)帝(ケイ)、之(セル)、惣(ハンアル)、国(レルユス)、名(ランド)、人(ペートル)、名(テコ)、人(ロート)」。

109) スウェーデンとの北方戦争に勝利したロシアの首都サンクトペテルブルグでは、1721年、1カ月続く祝宴が催された。

110) 帝号授与は正確には1721年、享保六年のこと。

111) アレクセイ・ミハイロヴィチ、ロマノフ朝第2代のツァーリ、在位1645-76年。

112) フォードル3世、在位1676-82年。

113) イヴァン5世、在位1682-96年。

114) イヴァン5世はピョートルの伯父ではなく異母兄。

115) ピョートル(ペートル)の即位直後の史実は以下のとおり。1682年、わずか10歳でピョートルが即位した直後、異母姉ソフィアが銃兵隊を巻き込んでクーデタを起こした。彼女が実弟イヴァン(5世)を帝位継承者として押し込み、大方の期待を担って即位したピョートルの共治帝となった。政治の実権はしばらくソフィアの掌中にあり、ピョートルが実際に政権を担ったのは、彼女がモスクワのノヴォデーヴィチー修道院に幽閉される1694年からである。岩間徹(編)『世界各国史4 ロシア史(新版)』、pp.215-16参照。

あった。1725年、享保九（十）年、ペーテル崩御、享年 52、在位は 43 年に及んだ。この人は大英主で、元禄の御世以来大業を成し遂げた。その点詳しくは後述する。

シユウシヤ<sup>116)</sup>の国は近隣第一の強国であり、古来よりムスカウヒヤと兵戈を交えてきた<sup>117)</sup>。そのためペーテルの時代に、ムスカウヒヤはその都をシユウシヤとの国境に移して<sup>118)</sup> 防御を固めた。のちにシユウシヤは講和を求め、貢物を奉って臣従することとなる。これによってヲロシアは、カスヒーゼイ<sup>119)</sup>（北高海）から海路を通じて帝都ペーテルベルケに達し<sup>120)</sup>、ラトカという湖<sup>121)</sup>を経て東海にいたる。こうした地の利を得て通商の道が隆盛をきわめた。

\*海の名ヲラストセイ（東海）、ルユスランドの都ムスコウヒヤの西方の海である。この記述がオランダのものなので東海と訳した<sup>122)</sup>。

ペーテル<sup>123)</sup>ベルケで出された遺詔や遺計ははなはだ多く、これよりのちの代にはみなそれらを以って国の指針とし、以後国は大いに栄えた。ペーテル崩御のとき、嗣子がまだ幼弱であったため、遺訓にしたがい皇后<sup>124)</sup>が即位した。このときペーテルの恩沢きわめて深く、民はみな亡き父母の喪に服するがごとくであった。この女帝はペーテルに劣らぬ英主で、直ちに勅諭を発して「民の父は昇天し給いたれど、民の母は世にある。心傷ましむることなかれ」と布告した。詔勅を聞き、人々は国をあげて悦びしたがった。女帝その名をカタリナという。近傍の国々は女帝を深く敬い、貢物を贈った。オランダからもこのとき使節が遣わされた。このころ、皇帝はケイセル、皇后はケイセンと呼ばれていた<sup>125)</sup>。女帝カタリナは 1727年、享保十二年崩御。享年 47 歳<sup>126)</sup>、在位 3 年目であった。十七条の遺訓を残した。幼帝ペーテル（父の名を姓とする）テウコエ<sup>127)</sup>（二代目の意）があとを継いだ、1730年、享保十四（十五）年、天然痘に罹り亡

116) スウェーデン。

117) 1240年、アレクサンドル・ネフスキーのときのネヴァ河口の戦い、16世紀後半、イヴァン4世のときのリヴォニア戦争などでロシアとスウェーデンはしばしば兵戈を交えたが、直接には、1700年から1721年までつづくロシア＝スウェーデン間の北方戦争があり、ロシアが勝利してニスタット和約が結ばれた。

118) 1703年に開始された新首都サンクトペテルブルグの建設。

119) カスピ海。

120) 帝都はサンクトペテルブルグ。サンクトペテルブルグまで「海路を通じて」とあるのは、カスピ海から大河ヴォルガなどを經由する水路を意味している。

121) ラドガ湖。

122) 「ヲラストセイ」はオランダ語 de Oostzee。オランダから見た「東の海」で、バルト海を指す。

123) 北門叢書版のペーテルの記述は「ヘーテル」が混用されるが、本稿ではペーテルで統一した。

124) エカチェリーナ1世、在位 1725-27年。

125) オランダ語 keizer と keizerin。

126) 史実では 43 歳。

127) ピョートル2世、在位 1727-30年。ピョートル1世の孫。

くなった。享年 16 歳であった。先帝ペーテル大帝の姪アンナイハンノウナ<sup>128)</sup>が継いで女帝となる。父の名はイハンアレキシウイツツ<sup>129)</sup>、ペーテル大帝の異母兄で、一度帝位に就いた眼病の人である。アンナは 1693 年、元禄八(六)年に生まれ、1740 年、元文五年に亡くなった。在位 25 年<sup>130)</sup>、享年 46 歳であった。この人、当初は先帝の規範を守ってよく治めたが、晩年になると乱脈なることあり、国法も乱れ、よろしからぬこともあったという。崩御のあと、その子イハンテリイ<sup>131)</sup>が継ぐが、生後数カ月の幼子であった(この人誰が種とも知らず、確かなのはアンナが産んだことだけであった)。このあたりはいまだ詳らかではなく、読み解きたい箇所である。その翌年の 1741 年、寛保元年、12 月 5 日の夜、首都で一騒動がもちあがった<sup>132)</sup>。これによってエリサベツト<sup>133)</sup>の即位が決議された。エリサベツトはペーテル大帝の娘である。  
\*ベシケレーの書にはここまでの記述があり、この先はゼヲカラーヒによって書き継ぐ。

一、1762 年、宝暦十二年、エリサベツトが崩御し、女帝カタハリイナテウエ<sup>134)</sup>が即位した。カタハリイナは 1744 年、延享元年、7 月 9 日に生まれた。その素性は詳しくはわからない。1781 年、天明元年、37 歳。すなわち現在の皇帝である。英明賢良の君主と称され、姓をアレキシコサという<sup>135)</sup>。

### ヲロシヤ開業の次第

1514 年、永正十一年、帝号を用いる。

1550 年、天文十九年、トホルスカヤ<sup>136)</sup>を領する(これは東アジアの域内にある)。1552 年、天

---

128) アンナ・イヴァノヴナ、在位 1730-40 年。

129) イヴァン 5 世。

130) 実際は在位 11 年。

131) イヴァン 6 世、在位 1740-41 年。この人は女帝アンナ・イヴァノヴナの子ではなく、アンナの姪アンナ・レオポルドヴナの子。

132) 1741 年の宮廷革命。ロシア宮廷における「ドイツ人支配」に反発したロシア貴族たちが近衛連隊に結集してクーデターを引き起こし、一夜にしてイヴァンの廃位、エリザヴェータの登位を実現した。『図説世界文化地理大百科 ロシア・ソ連史』、pp.101-02 参照。

133) エリザベータ・ペトローヴナ、在位 1741-62 年。

134) エカチェリーナ 2 世、在位 1762-96 年。

135) エカチェリーナは 1729 年生、1781 年当時は 52 歳。1744 年生誕で 37 歳という記述は、彼女がピョートル 3 世に嫁した 1745 年を生年と混同したためか。また、アレキシコサは姓ではなく、彼女の父称アレクセーエヴナのこと。

136) 地名からシベリアの都市トボリスクと思われるが、トボリスクの建設は 1587 年とされているので年代が合わない。トボリスクの語源となった「トボリ川流域地方を領した」の意味か。トボリスクは西シベリアに位置し、18 世紀には総督府が置かれてシベリアの郡都となった。

文二十一年、カサン<sup>137)</sup>を征服、1554年、天文二十三年、アストラカン<sup>138)</sup>を征服する（カサンは北高海<sup>139)</sup>の西北に、アストラカンは北岸に位置する）。

1640年、寛永十七年、イルクツコイ<sup>140)</sup>を征服する（これはアジアの域内にある）。1685年、貞享二年、ネルトシキンシコイ地方のネルトシキに城を築き、中国国境を固めた<sup>141)</sup>。城とは長城のことである。長城に関所を置き、ここを通じて中国北京とロシア帝都とのあいだで使者や物が交わされた（ネルトシキンスコイは韃靼の背後、すなわち、いにしへの韃靼の故地にある）。1703年、元禄十六年、インケルマラント<sup>142)</sup>を併合して城を築いた（ここはロシア西北にあたり、ヨウロハ<sup>143)</sup>の域内にある）。1703年、元禄十六年<sup>144)</sup>、この地に皇城の建設を開始する<sup>145)</sup>。この地は前述のとおりシウシヤとの国境地帯にあたる。建設を命じた皇帝はペーテルであり、城下の名称をペーテルスヒュルゾ<sup>146)</sup>とした。

\*スヒュルゾは山、スは助字で<sup>147)</sup>、このちペーテルをヘーテルヒュルゾとも呼ぶようになった。

1713年、正徳三年、カムサスカを併合する。ここはすなわち東狄の地である。1721年、享保六年、レイフラント<sup>148)</sup>を併合した（これは皇城の近く、ヨーロッパの域内にある）。1722年、享保七年、ペーテルに尊号が授与される<sup>149)</sup>。1724年、享保九年、センスコイに城を築いて中国国境を固め、交易により大いに利益を得るようになったという。以上の三つの関所を通じて中国とのすべての交易が行われた。同年、カピタン某がカムサスカ海域の島々にやって来て、それらを支配下におさめた。

---

137) ヴォルガ川中流域にあったカザン汗国の都。かつてロシアを支配していたキプチャク汗国の継承国家の一つ。1552年にイヴァン4世（雷帝）がこれを征服した。

138) アストラハン汗国の都。カスピ海北岸に位置し、キプチャク汗国の継承国家の一つ。1554年にイヴァン4世（雷帝）がこれを征服した。

139) カスピ海。

140) イルクーツク。ただし、イルクーツクの建設は1661年であるため年代は符合しない。

141) ネルチンスク地方ネルチンスク。ネルチンスクに砦が築かれたのは1654年であり、1685年は古文書集成版では1689年となっていて、これはネルチンスク条約締結の年。

142) イングリア。フィンランド湾南東岸の一带、北方戦争でピョートル大帝がスウェーデンから奪還した。

143) ヨーロッパ。

144) 本文ではなぜか「寛文元年」となっている。

145) 新首都サンクト・ペテルブルグの建設のこと。

146) Petersburg。

147) 「ヒュルゾ」はPetersburgのburgの部分であるが、山を意味するbergと理解したのか。「ス」sはオランダ語所有格語尾である。

148) リーフラント。現在のエストニア南部からラトヴィアにまたがる地方。

149) インベラートルの称号授与は1721年。詳しくは注107を参照されたい。

\*これは赤狄と口蝦夷の中間にある千島の島々である。なお安永九年<sup>150)</sup>にやって来たオランダ人の物語を通詞に聞くと、蝦夷の千島の島々を順に抑えて、島ごとに砦を構えて城郭を築いたというが、これなどもその類の出来事か。

島人が島名を請うと、カピタンはサンタトロウレンスと名づけた。1730年、享保十五年、女帝アンナのときカムサスカが一度離反したが、ほどなく再び服従した。その後女帝の命をうけて、中国と日本どちらとも通路を開くこと、また、二国の強弱、防備の有無を見定めながら、交易の途を模索すべしとの評議があったとオランダ書は伝える。女帝アンナはまた、ときの役人ハールヘルヒア（ハールは大夫、ヘルヒアは人名である）に命じて、オランダ（ホルラント<sup>151)</sup>）のセイカピタンであったハレンベルグという人物を同行して、カムサスカより南日本地方への探検航海に赴かせた。このときはオランダ人セイカピタンのみが先乗りしたようである。

\*セイカピタンとは、海を意味するオランダ語セイ<sup>152)</sup>と、将を意味するカピタンのこと、日本の番頭などの類にほかならない。ただし、この辺りの文章はとくに入り組んでいて、確かな読みはむずかしい。前後の文脈から推測するに、海事であるからとにかくオランダ人には及ばないので、航海巧者のカピタンを頼んで案内者として連れて行ったものであろうか。とはいえ、案内者としてばかりではなく、役人として遣わしたようにも見える。いずれにしろオランダとはきわめて親密な関係にあったように見える。

赤狄カムサスカから南ヲロシヤ領内の島々を乗り越えていく先には34の島がある。ある島に上陸しようとするも、島人が拒んで上陸を許さない。そのとき船中にクルの人を乗せていたので、この人を通訳に立てた。

\*クルはカムサスカ半島の南の先端にある地名、蝦夷に近いので蝦夷語に通じた人がいる。

通訳がうまくいって島に上陸することができた。島人は慈心に篤く救恤を惜しまなかった。この島は草木の果穀がよく稔るところで、その産物を取り込んで船に積んだ。この島に停泊しても怪しむ気配はなかった。

\*オランダのセイカピタンだけが行って、この趣を早船で報告した。現地へ赴く途上にあつたハールヘルヒアは途中で報告に行き合い、赴くに及ばずと考へて帰還したように聞こえる。書物の文章がとても難しく解釈しがたいが、主意はこのようであつたと思われる。

---

150) 1780年。

151) ホラント州。

152) オランダ語セイの綴りは zee、発音はゼイ、ゼーに近い。

さて、この兩人<sup>153)</sup>の評議の結果、シイナ（中国のこと）、ヤツパン（日本のこと）への交易にはこの筋から入るのが適切であると意見が一致した。1734年、享保十九年、カウカシユス<sup>154)</sup>を併合する。

\*この地はアラビアの後ろ、ヲロシヤの東南の地で、アジアの域内にある。

1735年、享保二十年、ヲレンヒルグ<sup>155)</sup>を獲得。1741年、寛保元年、カピタンヘルヘリア云々。

これ以下の文章は翻訳しがたく、しばらくこれをおく。かくのごとくの記事を読めば、ヲロシヤは破竹の勢いと見えて恐ろしい。アジアの北、韃靼の故国はシベリアといい、地図にあるごとくの大国である。近来まで韃靼の故国でありながら、中国の官人<sup>156)</sup>で左遷の人がこの国の守護を務めた。すべて中華の支配下にある。この国の庶人のうちにアンカ<sup>157)</sup>という人がいた。一国を傾けるほどの大富豪で、知勇の人でもあった。あるとき大盗賊が蜂起して大軍で押し寄せ、国中が沸き立った。ときの守護たちはみな盗賊によって滅ぼされた。アンカも防戦の力が尽きて、はじめてヲロシヤに救援を求めた。ヲロシヤは直ちに大軍を派して乱を鎮め、法を改め、<sup>まつりごと</sup>政をただし、上から下まで国民を見舞ってのち兵を引き揚げた。シベリヤの万民みなヲロシヤの徳を慕い、ことごとく服従することとなった。ヲロシヤが領土を拡げる作法はみなこの類である。兵威を以って荒々しく切り取る。そうしながらも、名分のない出兵はしないという。

### 松前より写し来たる赤狄人図説のこと

松前人が密かに見せたる赤狄の絵図というものを見た。一向に絵心のない人が描いた絵図なので、ここではそれを省略し、文章のみを記す。朱書きは私見の部分である（以下、本文の下に付した細注は朱書きの分である）<sup>158)</sup>。

#### 一、ヤクツコエ国の役人、名はエハンテ

\*ここに拙い絵像があるが省略する。以下もこれに準ずる。この人物は日本語の通詞である。ヤクツコエ

---

153) 北門叢書版はここを「當人」と記すが (p.238)、ここでは古文書集成版の「兩人」(p.48)をとった。

154) コーカサス地方、ロシア語でカフカース。18 - 19世紀の長いカフカース戦争の渦中で、支配権は目まぐるしく交替した。したがって、このときの併合が最終段階ではない。

155) オレンブルグ。ウラル山脈南端に位置する都市。1735年にウラル川とオリ川の合流点に要塞が築かれたのがはじまり。

156) 古文書集成版では「宮人」。

157) 古文書集成版では庶人は「既人」、アンカは「アニカ」(p.48)。

158) オランダ本絵図が省略されており、ここからしばらくは絵図のいわばキャプション部分である。なお、工藤平助の私見が述べられた朱書きの部分がどこかは、北門叢書版には指定されていないので、ここでは朱書きを用いなかった。古文書集成版には朱書き箇所の指示がある。

はヤクツコイの誤りと思われる。コイは国名の下に付く方言である。ヤクツコイという国がある。思うに、オランダ人の耳にはコイと聞こえ、松前人にはコエと聞こえたということか。ただこの点は推測しがたい。

上着は柿色の羅紗、下着は本色<sup>159)</sup>の羅紗、股引は柿色のテヤウン、笠は黒ビロード、縁には金紗が織り込まれている。髪は白苧<sup>160)</sup>の煤けたような色、衣服の作り方はオランダの如し。太刀を手に持ち、さやには銀粉が施され、柄は皮製に見え、鐔はない。靴は革製である。

一、赤人の首領たる人、その名をシンサハリン<sup>161)</sup>、父名<sup>162)</sup>はクシテレイヤコリウキ。去年は父に替わってやって来た（それを考えれば、毎年来ているように思われる）。眉は白く、髪も白い。上着は本色<sup>163)</sup>羅紗、股引きは白ビロード、靴は黒皮で模様がある。

\*靴の形はオランダ風である。左手に鼻をかむ風呂敷<sup>164)</sup>を持つ。右手にはスイカを二つに切りたるような頭巾を持つ。ヲロシヤの役人であろうか。

一、赤人の国続きの夷（私が思うに千島の人ではないか）、この人は蝦夷人の通詞である（蝦夷と赤ゑぞとの通詞であろうか。クルの人とはこのような人を言うのか）。名はシリイタリ、髪は黒く、上着は紺色の唐木綿、下着は萌黄色の羅紗、帯は真糸の大真田撚りのものである。組髪にしている<sup>165)</sup>。

\*本によれば三つ組か、図を見れば三つ組のように見える。

金の括りで結び、耳飾りはない。

\*このことから考えるに、カムサスカの人はみな耳飾りをする事が分かる。前述の耳飾りの説が相当している。この絵図を見ると、眉毛が左右連なっていて、蝦夷人の面影が見える。右手に鼻拭きを持つ。服装はオランダ風に見える。

---

159) 古文書集成版では「ハナイロ（花色）」(p.49)。

160) からむし、イラクサ科の多年草。

161) 1779（安永八）年、交易を求めて厚岸にやって来たイルクーツク商人シェバリーンのことか。詳しくは吉田俊則「プロヴィデンス号来航異聞」、p.76 参照。また、『北門叢書』第一冊、pp.113-114 参照。

162) 北門叢書版の原文は「又名」であるが、ここは誤記と考えて、古文書集成版の原文「父名」(p.49) に従った。

163) 古文書集成版では「花色」。

164) もちろんハンカチーフのことか。

165) 編んで結んだ髪、あるいは辮髪のことか。

一、カムサスカの人、その名をキシコンテという。

赤人とカムサスカ人を区別しているが、松前人はアカヒトとカムサスカ人が同じであることを知らなかったのか、別々に記述したのか。髪は白苧の煤けたような色、上着は鼠色の羅紗、下も同じである。笠は黒羅紗、股引きは藤色の木綿<sup>166)</sup>。

\*服装はオランダ風で、鐙の反った騎射笠風を被り、左手に鼻をかむ風呂敷を持つ。被髪<sup>167)</sup>である。

一、ムシクワ<sup>168)</sup>の人、その名をエントン<sup>169)</sup>（この人はムシクワ人の中でもっとも身分の低い人物に見える）。上着は本色の木綿、下着は藤色の木綿、股引きはメリヤスのように見える。髪は白苧の煤けたような色、被り物は鼠色である。服装はオランダ風である。ムシクワはワロシヤの城下（すなわちムスコウ、ムスクハヒヤ）である。以上が五枚の人物画である。絵心のない人が描いたものらしく、拙い絵なので、どの絵も徴にはなりがたく、したがっていずれも省略した。

一、赤人国の名はワロシヤという。この説は既出のオランダ書の説と暗合する。したがって正説たることを知るべきである。

一、城下はムシクワという（すなわちムスコウヒヤ、このことは先に詳しく述べている）。

一、国主の名はヲホツケカラサハイリチという（これは当代の国主の名であろう。これらの絵図と説明は、何度もまた写しをしたものであるから、文字の間違いが多かるう。当主の姓はアレキシユサである。思うに、ヲホツのヲはアの字の誤りではないか。アレキがアホツケと転じたのか。シユサとカラとは甚だしき相違であるが、ラテン文字の読みの問題があり、なんとも言いがたい。口伝では、サワイリチはサワイリナの誤りかという。チとナとは書き違いもありえよう。当主の名前のカタハリイナのカとサとは混同して読むことがある。ゆえに、サハリナとカタハリイナとが互いに転じうることも理解できる。こうしたことは口伝だけでは判断しがたい。いずれにしろよくよく考えてみると、この国主の名は、ワロシヤ当代の主カタハリイナに相違ない<sup>170)</sup>）。

---

166) 「藤色の木綿」は古文書集成版から (p.49)。北門叢書版では「下説」とのみ記されている。

167) 結ったり束ねたりしない髪型。

168) モスクワ。

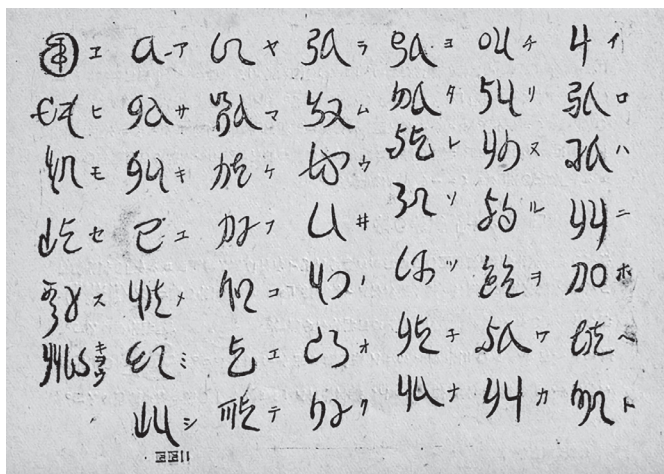
169) 古文書集成版ではハリエントン (p.49)。

170) この一段落は北門叢書版の記述が簡略で、古文書集成版から見れば脱落した箇所が多いと思われる。どちらの記述もその主旨に大きな違いはないので、ここでは後者の記述 (p.50) を基本とする。この段落では、国主の名「ヲホツケカラサハイリチ」がいかなる事情でエカチェリーナ・アレクセーエヴナから転じたか、したがって、モスクワの国主の本当の名がエカチェリーナであることを述べた上で、工藤平助は、ムスコウヒヤの国主がワロシヤ当代の国主エカチェリーナ (二世) に相違ないと主張している。

### ヲロシヤ文字のこと<sup>171)</sup>

〔挿入図は〕赤人の書く文字である。これは我が国のいろはを赤人文字で書かせたものである。ヲロシヤ文字は、すでに述べたとおり、横文字で左から右へ順番に書き、オランダ文字と同じである。〔意味不明のため3行省略〕

〔ヲロシヤ文字イロハ図<sup>172)</sup>〕



### 土産物

\* 丁字 (ウヲチテカ)、肉桂 (エクサ)、沈香 (キハクイン)、黄蓮 (スハロハ)、羅紗、シヤウシヤウヒ<sup>173)</sup>、ピロウドウ、チリメン、その他の品々。この中で、チテカコイサ以下の名称は思い当たるところがない。カムサスカだけの方言なのであろう。

オランダのことをアラビヤという。

\* これは根拠なきこと、聞き違いか間違いであらう。

171) ここからの記述は古文書集成版では多くの箇所が省略されているので、ここで北門叢書版に戻る。古文書集成版ではアルファベット図およびヲロシヤ文字に関する説明のいずれもが省略されている。

172) 大友喜作『北門叢書』第一冊、p.244。

173) 狸々緋。

仏のことをホホマテリ、極楽のことをライ、地獄のことをイチという（これもまた根拠がよく分からない）。

以上のことは松前人が私に教えてくれたことである。これらの説をオランダの書物に照らし合わせると、大方は一致する。両方の説明が一致することを見れば、正しい説に相違ないものと思われる。

一、この一卷（下巻）の考えは私の見識ではない。私は蕃学に未熟で自ら考察できないので、鴻学の士に教えを乞うて聞き取ったことを記した。

天明元年 四月二十有一日

(了)